

62【街の散策からの気づき発見】

神田川中流域散策2 関口芭蕉庵

会員 K.T.

神田川中流域の遡上を続ける。江戸川公園から関口芭蕉庵に向かう。1kmほどの江戸川公園遊歩道を出ると神田川沿いに散策路は更に続いている。椿山荘の塀を過ぎ、関口芭蕉庵の塀と正門がある。江戸川公園から約180mの川沿い散策路は文京区が管理している、とのことだ。神田川に架かる駒塚橋の傍に関口芭蕉庵はある。橋から神田川下流をみると芭蕉庵白壁と目白台地に建つ「ホテル椿山荘東京」が見える。椿山荘も、古い歴史がある。藤田観光ホームページから引用する。

「(前略)南北朝時代(1336～1392)現在の『ホテル椿山荘東京』周辺は、椿が多く自生していたことから『つばきやま』と呼ばれていたといわれます。その地を気に入った山縣有朋侯爵は明治11年(1878)に購入、庭園と本邸を建築し、『椿山荘(ちんざんそう)』と名付けました。(中略)大正7年(1918)、藤田組二代目当主・藤田平太郎男爵が、名庭をありのままに残したいという山縣有朋侯爵の意志を受け継ぎ『椿山荘』を譲り受けました。

(後略)」、この椿山荘の隣に関口芭蕉庵はある。説明碑によると、「この地は、江戸前期の俳人松尾芭蕉が、延宝5年(1677)から延宝8年(1680)まで、神田川改修工事に参画し、「龍隠庵」と呼ばれる庵に住んだと伝えられている。後に世人は「関口芭蕉庵」と呼んだ。享保11年(1726)、芭蕉の33回忌にあたり、芭蕉の木造を祀る芭蕉堂が建てられた。その後、去來・其角・嵐雪・丈草の像も安置された。芭蕉は、早稲田田んぼを琵琶湖に見立て、その風光を愛したと言われている。そこで、寛永3年(1750)宗瑞・馬光らの俳人が、芭蕉の真筆「五月雨にかくれぬものや瀬田の橋」の短冊を埋めて墓とした。この塚を「さみだれ塚」と称した。塚は芭蕉堂の近くにある。芭蕉庵の建物は、昭和12年(1937)3月、近火で類焼したが、同年8月再建された。しかし、昭和20年(1945)5月の戦災で焼失した。敷地内には、芭蕉堂・さみだれ塚・朱楽管江歌碑・伊藤松宇の句碑などがあり、往時をしのぶことができる。文京区教育委員会 平成10年(1998)3月」とある。俳聖 松尾芭蕉(1644～1694)が関口大洗堰等の神田川改修工事にかかわっていたのは意外な感じがする。小石川エリアの神田川改修工事は藤堂藩が担当した。芭蕉の役割は不明ながら、記録は残っている。宝永3年(1706)、芭蕉の門人、森川許六 編『風俗文選』全10巻5冊の巻頭、「芭蕉翁者伊賀人也。武名松尾甚七郎。奉仕藤堂家。壮年時辞官遊武州江戸。風雅為業。号桃青。及俳諧正風躰中興祖也。嘗世為遺功。修武小石川之水道四年也。速捨功而入深川芭蕉庵出家。年三十七。天下称芭蕉翁。遊東西南北説風雅助諸門人。國中万悉帰芭蕉風。一隅難波津伏病。終卒年五十一。葬江州義仲寺。(森川許六 編『風俗文選』)」とある。江戸時代、藤堂藩が関わった小石川の神田上水改修工事は、延宝5年(1677)から延宝8年(1680)の約4年間、この間、芭蕉も改修工事に関わったようだ。更に、『松尾芭蕉略年譜』で調べると、「延宝5年(1677)34歳、日本橋に住み神田上水の水役に任じたらしい。このころ俳句の宗匠として立機する。延宝7年(1679)36歳、すでに剃髪していたことが知られる。延宝8年(1680)37歳、杉風・ト尺・嵐雪・其角らの優秀な門人を持ち、江戸俳壇に一流を確立。居を深川に移す。(後略)」とある。芭蕉は、改修工事後の延宝8年(1680)に深川に移転し、「奥の細道」の旅にでる元禄2年(1689)まで約9年間、深川の芭蕉庵に住んだ。

俳聖芭蕉は、今日も人気がある人だ。現在、深川には芭蕉の資料や業績を展示した江東区芭蕉記念館がある。文京区の関口芭蕉庵は、幾度も延焼後、再建され、往時を偲ばせるたたずまいを残している。



駒塚橋から神田川下流



芭蕉庵/案内図



芭蕉庵/説明碑



句碑/(ふるいけや・・・)



芭蕉庵/胸突坂側出入口



芭蕉庵/ひょうたん池